



海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち

Rainbow's end



Day Dream

今回のDay Dream PalauのWEB-LUE取材は全てパラオ人ガイドで行った。
彼らの名前はモーイ、スター、ボボイ。大きな体躯は似ていても、性格の全く異なる3人。
Day Dream Palau代表・秋野大さんが、日本人スタッフと同じように活躍する彼らを
是非、紹介したいということだった。「ゲストへの対応、ガイド力はもちろんのこと、
とにかく、彼らの海に対するセンスは、僕らに真似ができないんです。

やっぱり海洋民族としての血なのでしょうか？

ほんと、それ以上は説明がつかないんですが、良いものを持っているんです(笑)」

と、秋野さんの言葉で今回の取材は始まった。

Photo & Text : **Yasauki Kagii** Special thanks : **DayDream Palau daydreamSPIRITS**
Design : **Chimi & PanariDesgin**



左からモーイ、中央はボボイ、右はスター。ランチタイムに上陸した無人島にて

取材初日、1本目のダイビングポイントはシアス・トンネルだった。ガイドを担当してくれたボボイは、エントリーの前に「もしギンガメアジが深い場所にいたら、少し浅い方に来るようにするね」とポツリと言った。きっとペットボトルで音を出して誘き寄せつもりでいたのだと思う。

壁沿いに潜降して、ボボイに導かれるままにトンネルの中に入りました。水深35m付近にギンガ

メアジの群れを発見した。上から見て、「少し深いかな?」と思い、ボボイの方を眺めると、もう1台の私の水中カメラを抱えたまま、静かに中性浮力をとっている。「あと少しギンガメアジを上げてもらっても良いのに……」と思いつつも、私は撮影を開始した。そして思い切って少し深度を下げると、大きな青い窓の中と外を行き来する魚群が浮かび上がっていた。地形と魚群が織り成すパラオな

らでわの景色がそこにはあった。

ダイビングを終えた後、「今日のギンガメアジはどうだった?」とボボイに聞くと、「とても良いシチュエーションだったと思う」と答えが返ってきた。

彼が無闇やたらとペットボトルでギンガメを浅瀬に集めていたら、この景色を見ることはできなかった。出来る限り自然の状態でパラオの海を見て欲しい、そんな彼の心遣いがとても気に入った。

青い窓に浮かぶギンガメアジの軌道



ボボイは大人ぶったキュートな20才

 海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち
Rainbow's end × **Day Dream**

ギンガメアジの群れはゆっくりと軌道を描いていた

未知なる感動への エピローグ

2日目の海撮影終えたところで、秋野さんが、「今日はジャーマンチャネルでマンタが7枚出たようです。明日行きましょう!」と伝えてきた。デイドリーム・ペリリューステーションの遠藤さんからの情報がはいていたようだった。

ガイドのボボイについて、ジャーマンチャネルに飛び込んだ。潮の流れは弱く、思いの外、透明度も高い。いつものクリーニングステーションを過ぎ、潮の流れに向かって泳ぎ出す。まず、視界に入ってきたのは、「どうしたの?」と目を疑いたくなるほどに密集したクマザサハナム口だった。パラオ以外の海、例えば、モルディブでも早朝に捕食のために群れを成す彼らをよく見るが、今、目の前にある景色はそれとは全く異なるものだった。まるで何か見えない手で操られ、水面近くに押し上げられたように凝縮している。

時間の経過と共に、クマザサハナム口の魚塊の下に今度はマダラタルミが集まりだした。そして、大きく口を開けては、まるでエサを投げ入れられた池の鯉のように、食事を始めた。初めてみるその光景に、私はすっかり興奮し、「大食いフードファイターも真っ青の食いっぷり!」と訳の分からないことを思いつつ撮影に夢中になっていた。もうこの展開だとマンタの出現が約束されていることは、未経験の私でも分かった。途中、ボボイが、「マンタが出た!」と教えてくれたが、私は依然、マンタはそっちのけで、クマザサハナム口、マダラタルミ、そして後からやってきたミナミイヌズミなどの集団捕食に夢中になっていた。

中央に見える小さな赤い点が捕食されるプランクトン

海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち
Rainbow's end × Day Dream

海のリズムを知るガイドさんを頼りに
ダイビングをする。
これまで知らなかった景色が
再び目の前に現れた。

 海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち
Rainbow's end × Day Dream

マダラタルミはまるで開眼するようにプランクトンを食べる

そして、身を翻したマンタが、
まるで私に
手招きしてくれているようだった

この日は計7枚のマンタが集まっていた



 海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち
Rainbow's end × Day Dream

モーイの視線に見守られ、
大食漢のマンタたちと
対峙する。

肛門の奥まで見えそうぐらいに
口を開けて捕食する



水面でVサインをするモーイ

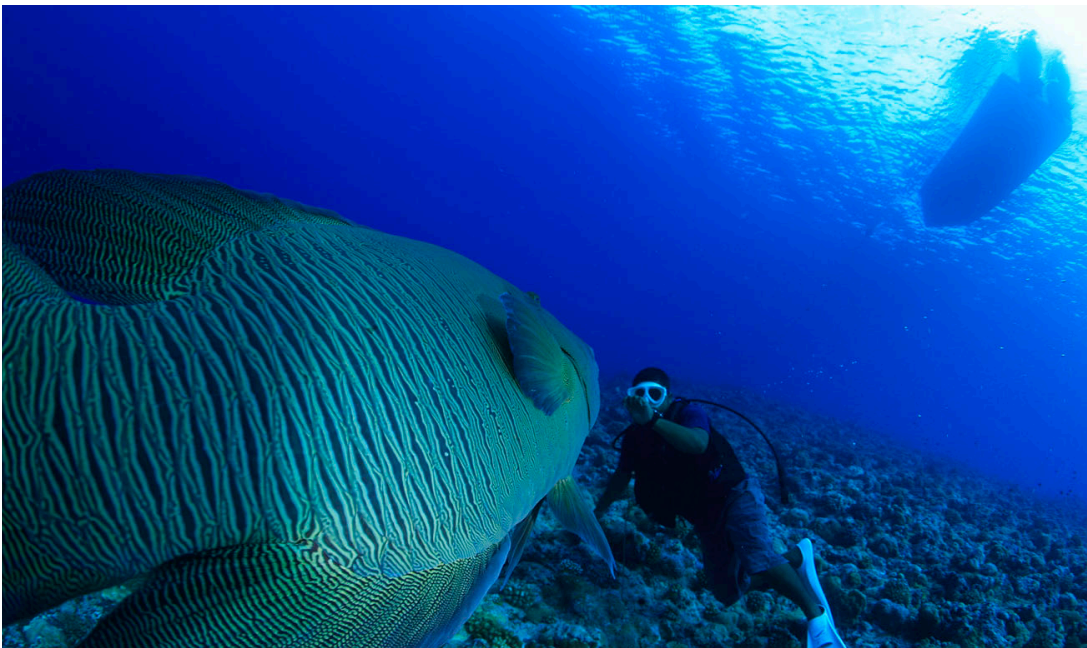
目撃例の高いブラックマンタも
回転して捕食する

翌日も、捕食の時間帯を計算してジャーマンチャネルのマンタの撮影に向かった。ガイドを担当してくれたのはモーイ。彼はかなりやんちゃなタイプに見える。ある意味、絶対的な海への自信が、その表情にも表れている。ペリリューの海で育った彼は経験も豊富で、若さもある。彼の鋭い眼差しは、海の男のように魅力的だ。そして、それはガイドという命を共にするものとしての安心感も与えてくれる。

マンタの捕食シーンを中层で撮影していると、自分の位置が時々わからなくなる。少し不安になり、振り返ると撮影の邪魔にならない程度の距離を保ち、しっかりこちらを確認してくれている。軽くOKサインを出すと、同じジェスチャーで返してくれる。

昨日よりも少し透明度は落ちたが、11枚ものマンタが乱舞する海中で私は集中して撮影を行うことができた。

大きなマンタが口を開けて身近に接近する。匠の一言



私は水中カメラを持って、ガイドたちの視線の先に広がる景色を映し出す

- 01:卵を持った振りをしてナボレオンを寄せる
- 02:美しいインゲンチャクの様むハナピラクマミ
- 03:常に大物を探すモーイ
- 04:割とフレンドリーで接近を許してくれるインドオキアジ



 海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち
Rainbow's end X Day Dream



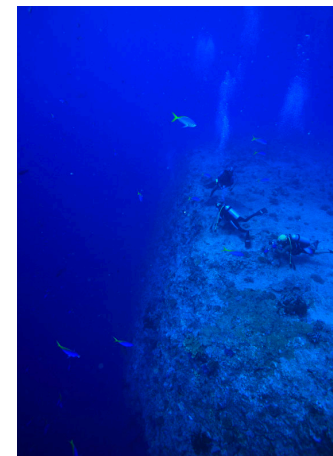
01:バラクーダの群れを指すスター
02:まるで銀河のように流れるギンガメアジの群れ
03:何が気に食わないのか、他方を追いやるカムリブダイ
04:ブルーコーナーの先端、ここが動物たちの舞台だ

ブルーコーナーの先端で、 私たちは自由に遊んだ

取材の最終日は、スターにガイドを担当してもらった。午前中の2本はブルーコーナー、午後はジャーマンチャンネルでのダイビングとなった。緩やかな潮がブルーコーナーの先端を洗う。私たちは先端に集まる魚たちと、無我夢中で遊んだ。初日のダイビングでは気になって仕方がなかった人懐こいナポレオンもなんとなくみんな興味薄。ギンガメアジの群れだって、形にこだわりながら、撮影のチャンスをじっくりと伺う。なかでも驚いたのは、カムリブダイの群れが、棚上ですっと捕食を続けていたこと。いつもなら微妙な距離で私を避ける彼らも捕食中はそんなことなど気にしてられないようだ。サンゴをガジガジと齧っては、大量の糞を撒き散らす。これが白い砂地を構成するひとつの素であるのだから、頭からかぶったと



ころで問題ない。透明度も良く私たちのグループは大きなグラウンドに投げ出されたかのよう各々の時間を楽しんだ。そんな時、スターは少し中層に浮かびながら全体を見ている。もう十分に遊んだのだから、潮の流れに乗って先端から離れることもできた。しかし、スターは先端から動くこともせずに、ただみんなも見守っていた。一度、頭上に大きなエンジン音があった。それと同時にウメイロモドキの群れが動いた。彼から逃げる方向とは逆にグレーリーフシャークが悠然と泳いでいた。ファインダー越しのそれは水中にまるで虹が掛かったように思えた。パラオの別名である「Rainbow's end」という言葉を海のなかで思い出していた。ブルーコーナーで撮影する意味がある景色だとの心から思った。その後、スターはみんなを呼び、外洋の方に向かって泳ぎ出した。彼が指差す方向にバラクーダの群れが見えてきた。彼は最後にこれを見せたかったのか、と思いながら、みんなはバラクーダの群れに囲まれて、そのダイビングを終えた。



ブルーコーナーで出会った
サカナたちの虹の景色

この瞬間、連続して3カット撮影した



パラオは「Rainbow's end」と呼ばれる。「虹の届く場所」という意味があるそうだ。とても素敵な名前だが、これにはちゃんと根拠がある。今回の取材中で虹を見ない日はなかった。それも日に1度ではない、2度も3度もでもある。それほど、パラオは虹が多い。朝、送迎車が海沿いのホテルにゲストをピックアップした時、ロビーの前で初老のダイバーが静かに虹を眺めていた。エキジットして水面に顔を出すと海の向こうに虹があり、無理やり水中カメラで撮影した。そして、ボートダイビングの帰りにも虹をよく見つけた。同じタイミングでそれに気がついたゲストと笑顔を交わす。こんなに素敵な時間は滅多にない。虹の存在が身近になり、私はパラオという島に恋に落ちた。

そして、モーイ、スター、ボボイ。
彼らのお陰で今回は本当に楽しい取材となった。海のなかでは、生まれ持ったセンスに任せてグイグイ行くタイプなのに、陸にあがるとシャイなところを見せる。みんなとても上手に日本が話せるのに、揃って照れ屋さんだ。
今回は撮影も順調に進み、今は感謝の気持ちでいっぱいだ。
本当にありがとう。

虹の届く場所に恋した写真家のキモチ

ダイビングを終えた後、水面から見えた虹
楽しいゲストの皆さんと取材を行うことができた

細 モーイはパラオの海のどこが好きなの? やっぱり生まれた島のペリリュウが好き?

モ やっぱりペリリュウコーナーかな?

細 モーイはずっと小さな頃からペリチュウでスピアフッシングをしてたんでしょ? どのくらいしてたの?

モ 14歳から14年間。最初はボートの着く桟橋から始めて、慣れてきたら、沖へ出て行った。あまり潮の流れ早いところではしてないよ、ペリリュウカット付近が一番多いかな。

細 14年間もしたんだったら、モーイの身体半分はペリリュウの魚で出来てるんだね。

モ だから、ペリリュウは本当の意味でも俺のホーム? タウンなんだ(笑) 細谷は?

細 俺にとってはブルーコーナーかな。ペリリュウもカヤンゲルもすごいと思うけど、

やっぱり、安心してガイドができるブルーコーナーが好き。潜ると「帰ってきた!」って感じがとてもするし。

モ 細谷は日本からパラオにまでやって来て、このデイドリームと一緒に働いているでしょ? この仕事のどこが好きなの? やっぱりオフィスワーク?? (笑)

細 そうそう、オフィスワークのためにやって来たの! って違う! 今は手を怪我して潜れないだけでよ、本

当は早く潜りたいよ。だって、以前日本で働いている時は、会社勤めで本当にストレスが溜まっていたんだ。1時間以上も何度も乗り継いで通勤したりして。それを考えると今の仕事は本当に幸せ。自然の中にいれる。確かに潜り続けると肉体は疲れるけど精神が良い状態でいられるからね。

モ 俺も以前はメカニックでいつもオイルまみれだった。お金も良くなかったし。今はダイビングが好きだし。ガイドしていて本当に楽しい。

細 モーイはストレスあるの? 素敵な女の子がこないとき??

モ それはダメでしょ、お互い既婚者だしね。でもまだまだいける? かな? (笑)

細 話は変わるけど、好きな場所ってある? 実は俺にとってはカヤンゲルなんだ。もちろん、ブルーコーナーでのファーストダイブで見たサメには驚いたよ。日本にいた頃は、ネムリブカを見ただけでログブックの1ページを使っただけくらい珍しかったからね。でも、その時のサメとはまた違った感動がカヤンゲルにはあったんだ。まず、水面から見た透き通る水の色が違う。不純物一切ないって感じ。

面倒見の良い鉄砲玉・モーイ


ジェントルな博打師・細谷

モ 確かにカヤンゲルは透明度が抜群。水深20mにいても5mくらいいる感覚だからね。コンピューターなしだったら危ない、危ない(笑)

細 インサイドのテーブルコーラルもきれいだしね。

モ 俺はサンゴよりもサメが気になる。あそこはメジロザメよりもシバーチップシャークの方が多い。

細 カヤンゲルエリアでは、カレントチェックでもサメが来る。この前、ボボイが追われて慌てていたよ、いや、スターだったかな? どっちでもいいけど(笑)

モ だから、あそこは釣りをするのが難しいんだ。必ずサメが来るから~!

細 ところで、この海でガイドをするときに、何か気をつけていることある?

モ 潮の流れ

細 俺も。一緒だね。

モ あとはキヘリモンガラ、サメより怖い!

細 確かに怖い。パラオのはスペシャルだからスノーケルチェックでも襲ってくる。

モ 俺たち、パラオの魚に追っ掛けられてばかりかよ~(笑)

細 モーイはダイビングのガイド中に気を使っていることって何かある?

モ 毎日、イメージはビッグフィッシュ! いつでも探している。

細 確かにモーイのスタイルはそうだね(笑) 僕らが棚の上にいる、外洋の方で大きい魚を狙っているよね。最近何か見た?

モ ……。

細 オレのほうが見るじゃない! カジキにハンマーヘッドシャーク! 実は森が教えてくれたから、彼のおこぼれだけ。

モ あっそ、リクエストがあれば、俺、小物も見せるよ。そういう細谷は?

細 俺はストレスダイブが嫌い。だからスローダイブを心がけている。モーイとはどちらかといえば、反対のスタイルだね。お客さんにリクエスト次第ってところもあるけど。

細 話はまた変わって、モーイは好きな日本食、嫌いな日本食あるの?

モ 何でも好き! でもラーメンかな。あとは寿司。

細 寿司って言っても、モーイはうなぎしか食べない

じゃん!

モ 細谷はバラオフードが嫌いなんだよね?

細 そんなことはないよ、確かに得意じゃないけど、海の上で食べるタピオカやタロイモは好きだよ。

モ じゃ、好きな女性のタイプは?

細 フィリピンの女性……ほんとにかわいい。

モ 俺は背の高くておっぱいもお尻も大きいダンスの上手なワイルドレディーが好き!

細 なんか話がやばくなってきたので、もう終わりにしようがいいんじゃない?

モ OK! お疲れさま。でも、こんなので大丈夫?

秋野&鍵井 多分……………。

面倒見の良い鉄砲玉・モーイ



ジェントルな博打師・細谷



海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち

Rainbow's end X Day Dream





スマートな思考をする大動物・スター × ボス・秋野 大

海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち
Rainbow's end × Day Dream

秋 スターはこの仕事をしていて一番楽しいことは？

ス やっぱりゲストと一緒にいることが楽しい。よくゲストのケア（世話）と言う言葉が使われるけど、僕にとってはケアではない。一緒にエンジョイしている感じ。小さい時は全て何でも一人でやらなくていけない環境だった。それにパラオは血縁関係が多くて、友達もいるけど、イトコも多いから。パラオ人のコミュニティーだけだと環境が狭いの。今、デイドリームで働くようになって、色々な人たちと関わりを持てるようになって、それがすごい嬉しい。以前はホテルのレセプションで働いていて、朝から夜までずっ

と座って電話などの対応していた。そんな毎日が嫌でダイビングを始めたの。

秋 ゲストとして、何が楽しいの？

ス 僕にとってただ楽しいのは普通。それに最低限のカスタマケアは必要。それは、ビジネスとしてだけではなく、僕にとってはもっと身近な対応かな。

秋 好きなダイビングポイントはある？

ス ポイントに1番も2番もない。全てのポイントが好き。今の僕はとにかくダイビングが好きだから

秋 この海でガイドをするときに、何に気をつけている？

ス 一番は自己管理、そしてゲストの安全。そして、サンゴなども含めた自然環境。他の人は、ゲストの安全や自然環境を挙げるかもしれないけど、僕はまず、自己管理。それができてないと何かあった時に、すべてのことに対応できないし。

秋 デイドリームでダイビングガイドをするようになって、何が変わった？

ス まず、ダイビングをととても勉強した。そして日本語も。以前、研修で西表島に行ったけど、あんな経験はデイドリームのスタッフじゃなきゃできなかったと思う。

秋 ゲストとダイビングをしていて何が難しい？

ス コミュニケーション、まだ日本語の勉強がしたい。それに来年にはインストラクターになりたい。

秋 なぜ、インストラクターになりたいの？

ス もっとスキルが欲しいから。正直、何がかわからない。だからしたいんだ。インストラクターになってから見える世界があると思う。それが知りたい。

秋 スターがゲストに自己アピールしたいことって何？

ス アピール……、ボクひとりじゃなくて、みんながいてデイドリームだから、それはない。



スマートな思考をする大動物・スター



ボス・秋野 大



秋 でもデイドリームはスターがいるからデイドリームなんだよ。スターと潜ることを楽しみにしているゲストもたくさんいるよ。スターは他のスタッフと何が違うと思う。

ス ……。わからない……。

秋 俺は知ってるよ。例えば、スターは頭が良くて全体を見ることができる。自分のことをしながら、全体を見ることができる。つまり、マネージャータイプだと思う。これは陸の仕事ばかりでなく、海の中でも同じ。それはすごいアピールポイントだと思う。

ス そんなの自分で言えないよ(笑)

秋 まだあるよ。いっぱいある。スターはとても優しい。ゲストのリクエストを断れない。

ス それはウィークポイントじゃないの……。

秋 まっ確かに(笑)。今日もジャーマンチャンネルでスターのゲストのひとりがマンタの通り道で待っていて。スターは、それをダメだと言わないんだよね。とりあえず、やってみて、結果的に、ダメだったら、自分があやまればい

い、そんなタイプ。良い悪いは別として優しいんだよ。スターは。

ス あれは、……

秋 あと、トラブルになったときに楯になってくれる。

ス ありがとう。僕にとってデイドリームはただの名前であって例えば、それが、ナイトドリームであっても何でもいいの。これはスタッフのみんなが作る会社だから。

秋 将来の夢とかある？

ス 将来のことはわからない、今が楽しいから。水中写真を始めて見たけど、まだ趣味って感じ。DPGS(デイドリームフォトガイドサービス)に興味があるし、もっと写真の勉強もしたい。

秋 最後に、今ライバルはいる？

ス 個人的なライバルはいない。ガイドして、どんなタイプにゲストが来ても対応できるみんなでいたい。ライバルは昨日の自分だと思う。

秋 いい言葉だね、頑張ってるね。



海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち
Rainbow's end × Day Dream

01:頼りになるデイドリームパラオのスタッフ陣
 02:夕食はスタッフとゲストが一緒になって楽しむ
 03:サービス内での賑やかなログ付けタイム



デイドリーム パラオ

DayDream Palau



本編で紹介したモーイ、スター、ボボーイが所属するダイビングサービス。代表の秋野大を筆頭に日本人、パラオ人混成の常勤ガイドが10名。ベテランから若手まで揃い、フィッシュウッチング派、カメラ派、ビギナー、ブランクダイバーやシニアダイバーまで幅広い層に支持される。リピート率も高い。また、個々のガイドセンスを生かしつつ、チームとしての総合的なガイド力、ゲストへの満足度などのボトムクリテューを挙げる努力を怠らない。常にポイント開発を積極的に行い、新しいパラオの海を紹介し続ける。これまでweb-lueで紹介し続けてきたデイドリーム ペリリューステーションも人気。

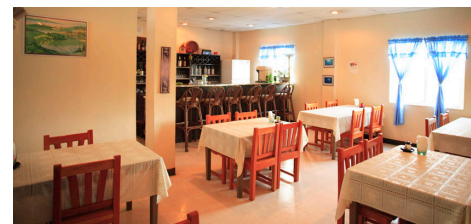


01:ココロホテルの外観
 02:美味しくてボリュームもある料理の数々
 03:4階にある人気のレストラン




ココロホテル

CocoroHotel




アットホームな雰囲気のあるホテル。客室はデラックスが4部屋、エコノミーが10部屋、シングルが2部屋の全16部屋。衛星テレビ、冷蔵庫、エアコン、ホットシャワー、トイレを完備。4階はローカルガイドさんたちにも人気のレストランを併設。お薦めはカツカレー\$8.50、オリジナルのサラダラーメン\$7.00、からあげラーメン\$8.00、そしてラーメンチャーハン\$8.00が人気。大型スーパーのWCTCまで徒歩5分、どらごん亭まで7分、アイランド焼肉まで3分と便利が良い。近くのアイランドマートで売られているパラオで2番目の美味しいドーナッツもゲストには人気。日本人スタッフの中尾知子さんが常動しているの、言葉の心配もなく心強い。一人旅のダイバーにも人気が高い。



パラオの海を全て知り尽くしたい
DayDreamの新しい出発
行き先は「北部・カヤンゲル」

穏やかな水の色とは対照的な
エキサイティングな海中が待ち受けてた。
WEB-LUE次号で第一弾を紹介！

カヤンゲルの無人島に伸びる美しい砂州、そして美しい女性モデル(?)

海洋民族の末裔・パラオの新しい匠たち
Rainbow's end  **Day Dream**